日本語の動詞の語幹とアクセントに關する覺え書き *

A Note on Verbal Stems and Accent in Japanese

千田俊太郎

TIDA Syuntarô

1　はじめに

本稿では、日本語の動詞の「活用形」の語幹としての再解釋の可能性について論じる。本來は語幹を論ずるには、拘束語根・接辭（附屬形式）と接語（附屬語）の區別の具體的な認め方や (cf. 服部 1950)、派生・屈折の捉へ方などの大きな問題が關はる。日本語の「語」の定義や形態分析の立場は様々だが、「「語」は、なにを措いてもまず、（中略）音声上の（潜勢としての）休止を前後において発音しうる最小の形態的単位」(宮岡 2002: 45–46) であり「アクセント現象は、狹義の音韻現象よりも、語の認定に役立つ筈」(奥村 1954) といふ見方を共有しておきたい。大まかな出發點として、日本語の自立語が音韻的にはアクセントの有無とアクセントの核位置が指定された形で、單獨で實現しうる領域をなすことも確認しておく。

日本語の動詞の活用形といはれる形式の性質について、時枝 (1978[1950]) は英獨佛語などにおける “conjugation” とは異なることを強調した (p.84)。この發言は、後の研究にしばしば引かれてゐる。時枝と同様に、印歐語の conjugation との同質性を否定する河野 (1989: 1585) が指摘する通り、學校文法の活用形には「2 つの文法機能が混在」してゐるやうに見える。すなはち、「飲む」の語形で示せば [noma’]-nai, [no’me]-ba, [nomi]-ma’su におけるブラケットで括つた noma’-（未然形）, no’me-（假定形）, nomi-（連用形）のやうな、後續形式によつて要求される交替形式である。「活用形」を要求する後續形式が接辭であるならば「活用」は語形變化ではなく語幹交替の現象といふことになる。一方で no’mi（連用形「中止法」）no’mu（連體形）no’mu（終止形）no’me（命令形）は「連辞性を示す統語機能」(河野

* 本論文の一部は JSPS 科研費 17H02333, 18K00533 19KK0012 の成果の一部である。音便の宿題を與へてくださり、本稿執筆の切つ掛けを作つてくださつたコ・ヨンジン先生に感謝する。その間、感謝すべき方々の多かつたことを痛感する。2011 年に國立國語研究所の「角田（太作）班」メーリングリスト上で語幹と活用形に關はる議論があつた。その際、佐々木冠、風間伸次郎、角田三枝、ハイコ・ナロクの諸氏がメールを投稿し、筆者は大いに刺戟を受けた。記して謝意を表する。またシモン・グジェラク、金善美、児玉望の諸氏と、母にも感謝する。

1989: 1585) を示し、まさに用言の屈折語形のやうに見える (cf. 芳賀 1962: 「断続変化」)。

かくして、各「活用形」が存在意義を有するとする場合の議論も大きく二種類に分かれる。最近の議論においては、佐々木 (2012, 2016) が未然形を形態的カテゴリーとして「認める必要がある」といふ時、交替語幹の一つとしての「活用形」の未然形を指してをり、「未然形語幹」といふ呼び方もなされる。ところが、Oshima (2014) が音便形が連用形であるといふ時、屈折語形の一つとしての「活用形」を指してをり、そのため屈折語形である音便形に後續する t 始まりの形態素「て、た、たり、たら...」は助詞であるといふ結論が導かれる。

より體系的な「活用形」の把握の試みとしては、用言の屈折語形のパラダイムを適切に修正しようとするものが多い。當然のことながら、そのやうな研究においては、舊來の未然形や假定形など後續形式のホストとなる形式は排除される一方で、學校で教へられる活用形に見られない多くの語形が屈折語形として新しく提案されてゐる。一方で、交替語幹としての「活用形」に關する議論はそれほど盛んではない。

本稿では、日本語の動詞の語幹の設定と、後續要素との間の境界設定の問題について論じる。§2.1 ではこれまでの研究において見られた、日本語の動詞語幹を短めに設定する方式を確認する。§2.2 では語幹と後續要素の連結部に出沒する連結音の歸屬が前方とするか、後方とするか、插入とするかについて多様な見解があることを見る。ついで、§2.3 で、不規則動詞を含めた動詞の統一的な記述を目指す立場からは、交替語幹としての活用形が一つの分析案として充分成立することを論じる。§3 では超分節音に目を向け、§3.1 で有核動詞と無核動詞の振る舞ひについて述べ、有核動詞の語形に見られるアクセント核は、擴張語幹全體に對して位置決定がなされる仕組みで説明するのが優れた解釋であることを論じる。§3.2 では語幹核の位置決定に關はる領域（語幹核領域）が基本的に活用形に一致する分析を紹介する。§3.3 では未然形が限定的にしか語幹核領域として認められないこと、否定動詞のアクセント的振る舞ひが相當に異なり、語幹核領域は學校文法の助動詞「ない」の活用を支持しないことを論じる。§3.4 では形容詞のアクセント的振る舞ひとゆれについて述べ、形容詞のゆれの在り方は、語幹核領域が無核になる新形の出現として適切に捉へられることを論じる。§4 は語幹核領域がアクセント以外の形態音韻的領域にもなつてゐることを論じ、語幹の重層性について述べる。§5 は結語である。なほ、本稿で單に「活用」といふ時には conjugation に對應するものとしてではなく、學校文法の「活用」のことを指すものとする。

2　日本語動詞の語幹

2.1　短い動詞語幹を設定する分析

學校文法の活用の説明では、動詞語幹とは動詞の「不變」の部分であるといふ[*1]。活用の主たる變化部を取り去つた部分が語幹であれば、だいたい一定の部分が取り出せるのはたしかだが、多くの言語において、また多くの分析において、形態素には異形態がありえるため、このやうな見方は一般言語學的な語幹の定義ではありえない。しかし、勿論ある言語のある語類における語幹が、たまたま「不變」であることはありえる。

日本語の語幹を「不變」の部分として定義すると、語形全體では全く異なる語彙が同音異義の語幹を持つことになつてしまふ[*2]。しかし、これが學校文法のやり方である。

(1)　a.　ka’-: 「書く」、「課す」、「勝つ」、「飼ふ」、「噛む」

b.　ka-: 「缺く」、「嗅ぐ」、「貸す」、「買ふ」

c.　ko’-: 「放く」、「漕ぐ」、「濾す」、「混む」、「凝る」

d.　sa’-: 「割く」、「指す」、「去る」

e.　to’-: 「解く」、「研ぐ」、「富む」、「取る」

f.　mo’-: 「もぐ」、「持つ」

g.　yo-’: 「止す」、「醉ふ」、「讀む」

h.　yo-: 「呼ぶ」、「寄る」

音便形式を含めて考へると、語形の「不變」の部分は「項目と配列」([I]tem and [A]rrangement) 方式に從つて表層の形式を分節する限り、だいたい上のやうになる。しかし、この分析によると、語尾の種類 (-ka/-ki/-i/-ku/-ke, -ga/-gi/-i/-gu/-ge, -sa/-si/-si/-su/-se...) が厖大に增え、それらの選擇は語幹の語彙的な情報によつてなされると考へざるをえないため、他の分析に比べて記述の效率は著しく低い。現代の多くの言語學者がこの分析を取らない所以であらう。

同じ IA 方式の分析でも、Bloch (1946) のやうに語幹の交替 (短形 short base/長形 long base) を認めれば、交替語幹の形式を二つ (2) にとどめた上で、語尾の種類を大幅に削減で

[*1] 學校文法の記述方式について、沖 (1989) が取り上げた國語教科書の紹介を參考にすると、「活用形のうち、形の変わらない部分」、「各活用形の中の変わらない部分」などの表現が見られる。

[*2] 學校文法で語幹が同音異義になる動詞群の中には一部の語形で實質的な同音異義語になる。(1) の中では「勝つ」と「飼ふ」の語形「勝つた」と「飼つた」がそのやうな例である。

きる[*3]。

(2) a. ka’t-/ka’Q- 「勝つ」

b. kaw-/kaQ- 「買ふ」

c. ko’r-/ko’Q- 「凝る」

d. sa’s-/sa’si- 「指す」

e. to’k-/to’i- 「解く」

f. mo’g-/mo’i^{V}- 「もぐ」

g. yo’m-/yo’N^{V}- 「讀む」

h. yob-/yoN^{V}- 「呼ぶ」

さて、この分析においては、「解いて」の「て」や「もいで」の「で」のやうな音便形の後續形式について、語幹が語尾を選ぶやうな分布を別途説明する必要が生じる。Bloch は語幹に語尾初頭音の有聲化を示す記號を付してゐるが、この現象に關して「項目と過程」([I]tem and [P]rocess) 方式を取るものとも言へる。IA 分析の限界を浮き彫りにしてゐると言へるかもしれない。實は Bloch がもう一つ IP 方式を先取りしてゐる部分がある。「買ふ」の語幹 kaw-/kaQ- の第一の交替語幹の末尾の w である。これを形態音韻的な理由から設定するとしてゐるが、IA 方式を徹底させるなら kaw-/kaQ-/ka- の語幹交替を認めることになる。

Bloch の語幹交替はテ系接尾辭の接續に關する交替語幹を設定するものだから、sa’s-/sa’si-（指）のやうな、「音便」に關はらないはずのサ行四段活用の連用形も交替形として設定してゐることにも氣を付けたい。また、nasa’r-/nasa’Q- などの一部の尊敬語幹について、r が脱落する場合があることにも言及してをり、一貫した IA 方式では nasa’r-/nasa’Q-/nasa’- などの語幹交替を認める必要がある。このやうに、比較的規則的な語幹の問題を見るだけでも語幹交替の問題は起こつてくる。Bloch はさらに、不規則な語幹交替 ku-/ko-/ki-（來）、su-/se-/si-（爲）を認めてゐる。

音便に話をもどさう。語幹を少し長めに取つて、音便の問題を語幹交替だけで説明する方式もありえる。三上 (2002[1972]: 141) は基本語幹と完了語幹として「解く」to’k-/to’it-、「研ぐ」to’g-/to’id-、「問ふ」to’(w)-/to’ot-、「飛ぶ」tob-/tond-などを擧げてをり、音便の問題を語幹の問題にとどめる案を提出してゐる。これは見た目ほど荒唐無稽ではない。標準

[*3] Bloch の表記は本稿で改め、參考のためにアクセント核を表示した。Bloch の元の表示にはアクセント核は付いてゐない。

語の音便形には t か d しか後續しないが、丹羽 (2012a: 94) によると、三重縣錦方言では koita（扱）、koida（漕）、koisa（濾）のやうにサ行四段のイ音便が s を伴ふ例がある。丹羽 (2012a) が可能性として示す（しかし採用しない）kois-a（濾）の「分割法」は、共通語に比べるとさらに有力な可能性といへよう。

「指して」や「解いて」について、Bloch 流に sa'si-te, to'i-te と語幹を長く取る研究も多い (鈴木 1996; ナロク 1998) が、先の可能性とは逆に、sa's-ite, to'-ite と語幹を短く取る分析もある (清瀬 1971)。振り返つて見ると、學校文法の分析は音便形の問題全體を後續形式に歸する分析とも取れる。

境界設定の問題は音便形にとどまらない。「指します」、「指したい」;「解きます」、「解きたい」がそれぞれ sasi-ma'su, sasi-ta'i; toki-ma'su, toki-ta'i なのか、それとも sas-ima'su, sas-ita'i; tok-ima'su, tok-ita'i; なのかといふ、音便の起こらない連用形に諸形式が後續する場合全てに及ぶ。語幹を長く取れば語幹交替を認める必要が生じ、語幹を短く取れば後續形式の變異を認める必要が生じる。いづれにせよ、連結部の母音を後續形式に歸屬させて短い語幹を想定すれば、sa's-/sa'si- (2d) の語幹交替は認める必要がなくなり「不變」の語幹の理想に一歩近づくのは確かである。

IP 方式の分析を取れば、たしかに音便の現象に關はりなく、基底における「不變」の語幹 (3) にさらに近づく可能性がある (黒田 1960, 1967; 早田 1966; McCawley 1968)。

(3) a. ka't- 「勝つ」

b. kaw- 「買ふ」

c. ko'r- 「凝る」

d. sa's- 「指す」

e. to'k- 「解く」

f. mo'g- 「もぐ」

g. yo'm- 「讀む」

h. yob- 「呼ぶ」

IP 方式で、語幹末 w の脱落條件が a 以外の後續といふ音韻的なものであることは言ふまでもない。音便形はどうだらうか。この場合の音便形の實現形式の記述は、黒田 (1967) や McCawley (1968) の示す通り、上記の子音語幹に子音始まりの語尾が後續する際の、語尾 (例へば-te) に對する阻害音の有聲性の順行同化 (例へば so'g-de 削, yob-de 呼, yo'w-te 醉, to'r-te 取)、鼻音化 (yob-de→yom-de 呼)、調音位置の逆行同化 (yom-de→yon-de 呼, yo'w-

te→yo’t-te 醉) を、順序立てられた規則として設定する必要がある。また、語幹末に s を持つ場合の i 插入規則も必要になる。語幹末に g, k を持つ場合の音便形の記述はもう少し複雜である。g, k 語幹の末音を直接に母音 i に變換する過程を考へる立場もあるが (黒田 1960; 早田 1966; Matsui 1996)、McCawley (1968) では Chomsky の提案に從ひ、末音の摩擦化、s 語幹を含む摩擦音語幹に對する i 插入規則を經て、g, k から派生した摩擦音が脫落する過程を想定してゐる。

IP 方式による促音便・撥音便の導出過程においては、規則を 1) 有聲性の順行同化、2) 鼻音化、3) 調音位置の逆行同化と順序づけることが確實に必要になるのではないか。佐久間 (1936: 209–220) は撥音便を通時的な音變化として捉へ、この點で黒田 (1967); McCawley (1968) とほぼ同じ順序の變化を示した早い例になる。ただし、佐久間 (1936) では連用形の i 末音を持つた形式を初めの段階に置き、i 脫落を鼻音化の後に位置付けてゐる。ここで、「机上で考へられた音聲轉化の順路は、實は作り物でしかない」、「ある種の轉化は、同時に一擧に行はれるといふ方が、むしろ事實に卽してゐるといへる場合があ [る]」としてゐることにも、氣を付ける必要がある。考へ方の樣々な點が時代を先取りしてゐる。しかし、基底に末尾音 i を想定し、i 脫落で說明する場合には、他の諸規則の前に母音脫落を位置づける方が技術的には樂かもしれない。

このやうな IP 方式の分析を採用すれば、「書いて」ka’-i-te の-i-が語幹に所屬するのか、語尾に所屬するのかといふ問題はほとんど生じない。基底の ka’k-te が形態素境界を消失させる形態音韻過程で ka’ite に變換されるのである。つまり、基底に形態境界があつても、表層の語形における形態境界はない。そもそも表層に境界が存在しないのだから、この立場においては Bloch (1946) 流の音便語幹はありえない。音便の現象が語幹と語尾の融合の現象であると考へ、多かれ少なかれ表層における境界の不明瞭さを認めるものは多い (城田 1979; 鈴木 1996; ナロク 1998)。このやうな問題に取り組んだ黒田 (1960: 31–34) は、表層の音素の形態音素への「所屬の決定は、關係する音韻化の規則の型に準拠して行われるべき」(p.31) として、各々の形態音素の形態素への所屬を決めるための一定の指針を示してゐるが、分析の案（規則の立て方）に依存することに變はりはない。黒田 (1960) の方法では、例へば「貸して」は/kaS_0T_1e/から、/kaS_0te/を經て、S_0t の S_0 が si に音韻化される。この場合は、i は S_0 に由來するものだから/kasi-te/と境界を設けられることになる。異なる分析案を出せば、異なる境界を設けられる。實際、分節音を相手にするだけでは、多樣な境界設定案が提出されうるほどに、音便形式に語幹と語尾の境界設定をすることは難しい。

ここまで、現在一般的と思はれる考へ方に至る「不變の語幹」への道筋と問題點を辿つたが、「一段活用」や不規則動詞まで見渡して短い「不變の語幹」を設定する方法をみる

と、相當に多樣な見解が發表されてゐる。その中には、「する」や「來る」の語幹を子音一つと見るものがある。

(4)　佐久間 (1936); 阪倉 (1957)

　a.　「する」の語幹: s-

　b.　「來る」の語幹: k-

上の語幹の捉へ方は、一般的とは言へないが、動詞の不規則な語形變化を後續形式側の不規則性に歸するものであり、語幹をなるべく一定不變に保つ代はりに後續形式の異形態を認める「一般」方式の延長線上に位置付けられる。この分析を取る場合、IP 方式では後續形式側になんらかの過程を想定する必要がある。現在この分析が取られないのは、後續形式の異形態の選擇/導出にも相當な規則性があり、IP 方式での分析において後續形式にもある種の一定不變性が見出されたためであらう。次に語幹に後續する形式について瞥見する。

2.2　語幹の後續形式と連結音・連結形式の歸屬

しばらく「一般的」な語幹の見方に沿つて語幹の後續形式をみると、子音終はりの語幹（四段活用=子音語幹）と母音終はりの語幹（一段活用=母音語幹）に後續する形式群は、表層では同じ形式を持たない。例へば (5) のやうに、語幹の種類を條件にした異形態をもつわけである。

(5)　-u～-ru（終止）, -i～-∅（連用）, -o’o～-yo’o（意志・推量）, -e～-ro（命令）, -azu～-zu（否定）, -ase-～-sase-（使役）, -are-～-rare-（受動）

これらのうち、命令の形式を除けば、異形態の對應は形式の初頭の分節音（連結音）の出入りによるもので、子音語幹には母音始まりの異形態が、母音語幹には子音始まりの異形態が續くやうな綺麗なシステムが見える。そこで、長い方の形式を基本として基底形を立て (6)、語幹に接尾させた時に生じる子音連續の二番め、母音連續の二番目を削除する規則を立てさへすれば、全體の表層語形が導かれることになる。

(6)　-ru（終止）, -i（連用）, -yo’o（意志・推量）, -azu（否定）, -sase-（使役）, -rare-（受動）

この分析は、先の一般方式の語幹と相性が良いやうで、今ではほとんどセットになる假定であるが、實は連結音の削除を假定する初期の分析 (黒田 1960; Martin 1967; McCawley 1968) では、連結音を後續形式の一部とは見ない場合があつたことに留意したい。例へば Martin (1967) では否定の「ない」の前の-a-は、環境により脫落する獨自の接辭である。黒

田 (1960) も似た扱ひだが、S-構造の動詞的な連結接辭 R_1u, R_1e, I_1 (p.69) については形態論では 3-階の $[[kak_0]]_3$ の交代形の [kaku], $[kake]_1$ [kaki] (p.98) の 3-位のモルフ列として、付着させてゐる。

McCawley (1968) では連結子音については後續形式によせた上で削除分析 (p.95)、連結母音については插入分析 (pp.148–149) を取つてゐるやうである。この、連結母音の插入分析は、子音語幹動詞に對し文法的な環境により母音 a や i が插入されるものであるが、yom-a-na-i の母音 a、yo-i-ta-ku の母音 i の位置付けをみると、構造上は語幹に寄せて表示してゐる。最近の連結音の插入分析としては、Matsui (1996); de Chene (2009); Nasukawa and Backley (2011) の r の扱ひも注目される。

連結音を後續形式に歸屬させる分析の早い例は、早田 (1966); 清瀬 (1971) になりさうである。黒木 (2012) は清瀬 (1971) の分析を高く評價し、「清瀬文法」においては「語形成の上で要求される語彙的知識は、(i) 音形、(ii) 意味、(iii) 形態素類だけである」として、多くの語彙的知識を必要としない點が優れてゐるとしてゐる (p.111)。この「音形」にはアクセントが入つてゐただらうか。

問題は、脫落分析にせよ、插入分析にせよ、連結音を前後のどちらに歸屬させても正しい表層形が說明できることである。そこで、連結音の歸屬について留保する態度も見られる (角田 2007)。

佐久間 (1936); 阪倉 (1957) のやうに、語幹を短くとつて「する」s-、「來る」k- と考へる場合には、後續形式の異形態の現はれ方を「規則的」には導けなくなる。一方で、連結音を後續形式に寄せて一般方式の短い語幹を想定すると、これらの不規則動詞に語幹交替を想定する必要が出る。

清瀬 (1971) は「連結子音」や「連結母音」のやうに一つの分節音がつなぎ目に現はれる場合を取り上げたが、形容詞（清瀬の「定質動詞」）については、後續形式に-i, -kaQta, -karoo; -ku, -kute, -kereba, -kaQtara, -ito, -kutewa, -kutemo などの長い形式を認めてゐる。動詞の後續形式と比較すると、-kar-, -kere-, -ku- のやうなつなぎ目の形式がここにも見られるが、これが語幹側の要素でないとどうして言へるのだらうか。

連結母音・連結形式の問題は、朝鮮語にも存在し、筆者は連結母音に對して插入母音解釋を提出したことがある (千田 2012)。日本語の場合は複數の連結音（母音: a, i、子音: r, s）があり、狀況が異なる。日本語では連結音插入で說明するためには特別な形態音韻規則を立てる必要があるわけである。このやうな狀況では、連結音を基底に設定して脫落を想定する方が、音韻的に明快な說明ができるのはたしかである。しかし、先に示した不規則動詞の語幹交替の問題は解決されないし、境界設定の問題も解決されない。

2.3　語幹交替を想定する分析

不規則な語幹を含めた分布を考へて、後續形式の要求する前部形式の分類を便宜上學校文法の活用形から切り取る形でまとめると次のやうになる[*4]。

(7)　a.　未然形から切り取る語幹 1: kaw-（買）、sas-（指）、nasar-、ko’-（來）、si-（爲）

b.　未然形から切り取る語幹 2: kaw-（買）、sas-（指）、nasar-、ko’-（來）、se’-（爲）

—— -a-zu に先行する形式

c.　未然形から切り取る語幹 3: kaw-（買）、sas-（指）、nasar-、ko-（來）、s-（爲）

—— -s-ase-, -r-are- に先行する形式

d.　未然形から切り取る語幹 4: ka-（買）、sas-（指）、nasar-、ko-（來）、si-（爲）

—— -y-o’o に先行する形式

e.　連用形から切り取る語幹 1: ka-（買）、sa’s-（指）、nasa’r-、ki’-（來）、si-（爲）

f.　連用形から切り取る語幹 2: ka-（買）、sas-（指）、nasa-、ki-（來）、si-（爲）

—— -i-ma’s-u に先行する形式

g.　連用形から切り取る語幹 3: kaQ-（買）、sa’si-（指）、nasa’Q-、ki’-（來）、si-（爲）

—— 音便が起こる環境にある場合

h.　終止・連體形と假定形から切り取る語幹: ka-（買）、sa’s-（指）、nasa’r-、ku’-（來）、su-（爲）

i.　終止・連體形と未然形から切り取る語幹: ka-（買）、sas-（指）、nasar-、ko-（來）、si-（爲）

—— -u-ma’i に先行する形式[*5]

j.　命令形から切り取る語幹: ka-（買）、sa’s-（指）、nasa’-、ko’-（來）、si-/se’-（爲）

(7) は特定の環境から切り取つた語幹交替を認めるものであるが、そもそも後續の形式が決まつてゐるのだから切り取らない方法もある。交替語幹の性質の捉へ方により、方針が異なりえる。次に (7) に對應する「長い」交替語幹のリストを示す。

[*4] 本稿では屈折と派生の區別について周到な議論を行ふ用意がないが、ここでは屈折語形と派生語形の兩方のホストとしての語幹を區別なしに示してゐる。そのことは §4 でも若干觸れる。なほ、不規則動詞にはここにあげたほか、「くれる」（命令: 「くれ」）、「行く」（過去: 「言つた」）、「有る」（否定: 「ない」）、「言ふ」（終止・連體: yuu）などがある。なほ、阪倉 (1957) は後續形式のホストとしての活用形を分類してをり、參考になる。

[*5] いはゆる助動詞の「まい」の付く語形は、(7h) に接續する-ru-ma’i の形ももつ。

(8) a. 未然形語幹 1: kaw-a-（買）、sas-a-（指）、nasar-a-、ko’-（來）、si-（爲）

b. 未然形語幹 2: kaw-a-（買）、sas-a’-（指）、nasar-a’-、ko’-（來）、se’-（爲）

—— -zu に先行する形式

c. 未然形語幹 3: kaw-a-（買）、sas-a-（指）、nasar-a-、ko-（來）、s-（爲）

—— -(sa)se-, -(ra)re- に先行する形式

d. 未然形を語幹とする 4: ka-o-（買）、sas-o-（指）、nasar-o-、ko-（來）、si-（爲）

—— -(yo)’o に先行する形式

e. 連用形語幹 1: ka-i-（買）、sa’s-i-（指）、nasa’ri-、ki’-（來）、si-（爲）

f. 連用形語幹 2: ka-i-（買）、sas-i-（指）、nasai-、ki-（來）、si-（爲）

—— -ma’su に先行する形式

g. 連用形語幹 3: kaQ-（買）、sa’si-（指）、nasa’Q-、ki’-（來）、si-（爲）

—— 音便が起こる環境にある場合

h. 終止・連體形・假定形語幹: ka-（買）、sa’s-（指）、nasa’r-、ku’r-（來）、sur-（爲）

i. 終止・連體形と未然形の混合語幹: ka-u-（買）、sas-u-（指）、nasar-u-、ko-（來）、si-（爲）

—— -ma’i に先行する形式

j. 命令形語幹: ka-e（買）、sa’s-e（指）、nasa’-i、ko’-i（來）、si-ro/se’-yo（爲）

これを見ると、徹底した IA 方式による語幹は學校文法の活用形を環境にして交替する語幹、つまり學校文法の活用形をあるいは短く、あるいは長く取つた交替語幹にしかならず、統合できる語幹は終止・連體形から切り取る語幹と假定形から切り取る語幹 (7h, 8h) 程度でしかない[*6]といふことが分かる。どちらも同じ事實を説明できる。一つの語彙當たりの交替語幹の數を減らしたければ (7) になる。(8) は母音終はりの語幹が多いが不揃ひである。

なほ、學校文法では終止形と連體形を別に勘定してゐるが、このことはここでは不問に付したい。また、細かい觀察により、ここでは未然形 1/2/3/4、連用形 1/2/3 の區別をした。ただし、命令形については「する」の命令形「しろ/せよ」に對應する二系列の命令形が他の語彙で綺麗に揃はないので、便宜的に分けて示さなかつた[*7]。

[*6] Martin (1967) は假定形を終止・連體形語尾に命令形語尾が後續するものと見て、->rú-é-bá が->réba になるとしてゐるが、共時的には根據薄弱である。

[*7] ある種のスタイルの違ひのある命令形が他の動詞にもあり、一段動詞では tabe’-yo などは se’-yo に對應す

また、音便や w 脱落の過程を想定したところで、(7) の語幹交替の候補「連用形から切り取る語幹 3」(7g) と「未然形から切り取る語幹 4」(7d) の僅かに二つを減らすに過ぎない。そもそも日本語の動詞の形態分析における課題設定が、不規則動詞を含めた統一的な記述・分析にある場合には[*8]、IP 分析を徹底させても全ての語幹交替を説明するそれぞれの形態音韻過程が必要になる。實際に黒田 (1960); 早田 (1966) はこれらの語幹交替を説明する規則を設けてゐる。語彙的情報と文法的情報の雙方にわたる何かがいづれにせよ必要になるわけである。

語幹と後續形式の境界位置は、これまで充分な根據をもつて設定されてきただらうか。なるべく短くしてみるか、ある程度長く取るかといつた方針が恣意的に取られるばかりではなかつたか。上記の長い語幹 (8) から、むしろ學校文法の活用形を適切に修正して適當な交替語幹を認める可能性も見える。

語幹交替を設定する分析はこれまでにもあつた。なかでも Bloch 流の語幹の交替（基本・音便）を認める記述は多い。益岡・田窪 (1992) をその代表格として擧げておく。それに加へ、音便が起こらない連用形を交替語幹として認める分析も多い。ナロク (1998) をその代表格として擧げておく。ただし、ナロク (1998) は音便について IP 方式の分析をしてゐるので、音便語幹を立ててゐない。未然形の形式を語幹として立てる分析は少なくなる。しかし、佐々木 (2012, 2016); 田川 (2012); 江畑 (2013) など、複數の形態分析に見られる。未然形語幹を認める論者は音便が起こらない連用形も語幹として認める傾向がある。

以上より多くの交替語幹を立てる分析として、學校文法の活用形をおほむねそのまま交替語幹として認めるものがそれなりにある[*9]。河野 (1955) は「日本語の用言の活用は一面から言へば助動詞・助詞の續き方による語幹の變樣とも考へられる...」とし[*10]、河野 (1989: 1582) でも日本語について、「形式的に言えば、いわゆる「活用」は、動詞の屈折ではなく、2 次的な語幹の派生における語幹末母音の変容であって、「語基変化」と言うことができよう」としてゐる。そのほか、服部 (1950); 村山 (1965); Shibatani (1990); 宮岡 (2015) などが

るものとも思はれるが、四段動詞にはこの系列がそもそもない。「なさる」の命令形 nasa'r-e がこのスタイルの命令形（第二系列）に該當する可能性はあるが、「來る」に對する ko'-yo は現代語には殘つてゐないと考へるべきだらう。命令形の第二系列は、空き間を多くもつてゐる。

[*8] これが共有されてゐない大きな前提なのだと考へる。現在は日本動詞の形態分析において不規則動詞は個別の文法環境における個別の形式交替で説明するのが好まれるのであらう。佐々木 (2012, 2016) が訴へてきた未然形を語幹として認める議論には、基本的に本稿と同じ觀點が認められる。議論を未然形にとどめず活用形全體に廣げるとさらに説得力を增すやうに思はれる。

[*9] 學校文法の活用形を全體として交替語幹と見ないが「U 語幹」を認める丹羽 (2012b: 14) は特異な例である。

[*10] 河野のこの發言には註が付されてをり、「日本語の用言の活用には終止形・連體形或いは命令形の如く、獨立した機能を持ち得るものがあり、必ずしも助動詞・助詞の接續に應ずる語幹の變樣のみを以て活用の本質と見なすことは出來ないが...」といふ讓歩付きの見解である。

學校文法の活用形を語幹として認めてゐる。ただし、活用形を語幹とみることの正當化が說得的に論じられてゐるものは見當たらない[*11]。服部 (1950); 宮岡 (2015) はどちらも後續形式が語か接辭かといふ問題を主に取り上げ、境界設定の問題や、前部にある語幹の認め方については言葉少なである[*12]。

Vance (1987) には、動詞の語形について傳統國文法 (Traditional Japanese Grammar)、記述言語學の分析 (An American Descriptivist Analysis)、生成音韻論の分析 (A Generative Analysis)、を對比させる要を得たまとめが含まれる。その、傳統國文法の紹介 (pp.178–184) においては、/yoma/, /yomi/, /yomu/, /yome/ などの「活用形」のことを語幹 (stem) と呼び替へて活用形のことを六語幹システム (the six-stem system) としてゐる。學校文法の分析が、語幹交替の試みであると解釋してゐるわけである。

活用形を語幹として解釋する場合には、ゼロ屈折を多く認めなければいけないといふ問題があるかもしれない。ただし、無語尾（ゼロ屈折）が屈折接辭のパラダイムに入つてくることは珍しくない。ラテン語の動詞現在語幹は單獨で命令形になるし、ラテン語の名詞曲用にも無語尾はしばしばみられ、cornū の單數形では屬格以外の格は全てゼロ語尾をもつ。ポーランド語のやうに、動詞の 3 人稱單數語尾がゼロだつたり、名詞の單數主格（ポーランド語では男性名詞、中性名詞）がゼロだつたりするパタンはしばしば見られる。中にはドイツ語の名詞のやうに語形の多くにわたりゼロ語尾をもつ語幹もある。ゼロどころか、フランス語の形容詞 (mauvaise /movɛz/, mauvais /movɛ/) のやうに、語幹から形式を取り去るタイプの形態法も知られてゐる (Nida 1970: 75)。語幹が單獨で一語形としてはたらくことは、そこにゼロを假定するかどうかをひとまづおけば、多くの言語に見られることである。

意味を持たない語幹形成辭の扱ひも、活用形を語幹として解釋する際の問題とされるかもしれない。しかし、日本語の動詞の活用形と同樣の、膠着的な語幹形成、つまりある交替語幹から連結的な形態法で別の交替語幹を形成することは珍しくない。ラテン語の最も規則的な動詞について am-ō/am-ā-re/am-ā-v-ī/am-ā-tu-m、極めて不規則な動詞について fer-ō/fer-re/tul-ī(tetul-ī)/lā-tu-m と四つの語幹を代表する語形を教はることを思ひ起こされたい。Vance (1987) の言ふ通り、語幹形成辭の存在は、この分析の大きな難點とはいへないし、音配列上日本語として發音できるカタチを作つてゐるといふ意味で一定性を保つてゐるともいへる (p.199)。

[*11] Shibatani (1990) は長めの議論を行なつてゐるが、語構造に關する理論を先行させてをり、どのやうな事實から語幹が必要になるのかといふ觀點がないやうに思はれる。このことについては佐々木 (2016) による批判も參照されたい。

[*12] 宮岡 (2015: 165) が「伝統的な「活用」を放棄する理由は認めにくい」とし、これを「語幹の変様」とするのは河野 (1955) の考へ方を直接に繼承するものと考へられる。

終止・連體形の場合は單獨でも完成した語として使はれる語幹になるが、禁止の -’na などのホストでもある。「用言の語幹だけの形でも、立派に具体的な形になる。たとえば、書クという形は、何ら文法範疇を含まない不定な形であるが、具体的に使われる」(河野 1989: 1582) といふ。

假定形は單獨では使はれない語幹であるが、Zamma (1992) は次のやうな形態的な分布を引き合ひに出し、-(r)e には -domo も後續すること、-ba が -(r)e 以外にも後續することを示してゐる[*13]。

(9) a. ik-e’-domo ik-e’-domo

b. hitoziti=o ka’esi-te hosi’-ku-ba

c. yob-a’-ba yob-e

-ba の分布に對してはここになほ少しばかりの追加をすることができる[*14]。

(10) ta’be-ta(’)ra(=ba), tabe’-ru=na(’)ra(=ba), (ki’zi=mo) nak-azu-’ba, iso’g-a-ba (mawar-e), yo’-kere(’)ba, sa’monakuba,

命令語幹のみ、單獨で完成した語として使はれる語幹としなければいけない不思議な語幹ではある。もちろん、いくつかの不規則動詞を含めた統一的な形態分析として、命令語幹を交替語幹の一種として設定するメリットは存在する。

以上に見たやうに、不規則動詞を含めて動詞を統一的に記述しようとすれば、舊來の活用形を交替語幹として認める分析案が充分成立しえる。ただし、ここに見た命令形の問題と、一見統合可能な終止・連體形と假定形から切り出す語幹 (8h) については、分節音を相手にするだけでは今少し說得力に缺ける。屋名池 (1987) は屈折語形におけるアクセントの現象と分節音の現象との竝行性を捉へ、屋名池 (2005) は日本語用言が「アクセントの面でも語形変化する」として、アクセントを屈折語形の一部として捉へてゐる。本當だらうか。アクセントに目を向けてみよう。

[*13] 西山 (2012: 158) のやうに假定形の-(r)e を統語的な理由から形態素として取り出す議論もある。

[*14] この分布をから、=’ba の全ての場合を附屬語と認める考へ方がありえる。この問題について今充分に論じる餘裕がないが、sa’monakuba, -kere(’)ba などの、切り分けがたい形式の中に話者に聯想を許す程度の形で殘つてゐる小さな何かから、附屬語的な振る舞ひをするものまで、グラデーションを持つものではないか。

3　語幹とアクセント

3.1　有核動詞と無核動詞

東京方言の動詞のアクセント[*15]が限られたパタンを示し、語幹は、變化語形のほとんど全部にわたり起伏型で實現する有核のものと、さうではない無核のもの（多くの語形で平板式で實現する）に分類できることは佐久間 (1919) によつて早くに指摘されてゐる[*16]。無核動詞の基本的な實現が平板である語形をまづ見たい。對應する有核動詞の語形には次末モーラに核があるもの (11) と、前次末モーラに核があるもの (12) がある。

(11)　a.　nar-i (鳴), na’r-i (成); ue (植), u’e (餓)

b.　nar-u (鳴), na’r-u (成); ue-ru (植), ue’-ru (餓)

c.　nar-e (鳴), na’r-e (成); ue-ro (植), ue’-ro (餓)

d.　nar-azu (鳴), nar-a’zu (成); ue-zu (植), ue’-zu (餓)

(12)　a.　naQ-te (鳴), na’Q-te (成); ue-te (植), u’e-te (餓)

b.　naQ-ta (鳴), na’Q-ta (成); ue-ta (植), u’e-ta (餓)

以上のアクセントの核位置は、語幹に對する核の有無の語彙的指定、接尾辭のアクセント上の性質と、實現規則を設定することによつて導出可能である。用言語形のアクセント分析にも IA 方式と IP 方式がありえるが、上の事實を説明するのには IP 方式が相應しい。多くの研究が核位置の語幹次末性に注目し、(12) が基本的なパタンだと考へてゐるやうである。

表層のアクセントの導出方法には大きく二つの有力な案が提出されてゐる。一つは、(12) に見られる語幹は、基底で核位置が指定されてゐるもの (nar-, na’r-; ue-, u’e-) と捉へて、語形により交替する核位置 (u’e↔ue’-ru, na’r-i↔nar-a’zu 等) についてはアクセント核移動の規

[*15] 以下でのアクセントは主に、東京方言の亞種を話す筆者の內省に依つたが、數種のアクセント辭典・國語辭典を參照して筆者の內省に一般的でないところがありさうなデータを排除してある。筆者は東京生まれ、横濱育ち（18 歲まで）である。育つた地域は東京のベッドタウンで生え抜きが少なく、住民は大まかに言へば東京方言の亞種を話してゐる。兩親はともに生まれと育ちが東京都である。

[*16] 本稿の「有核」と「無核」は、佐久間の用語では「起伏式」と「平板式」、Bloch (1946) の tonic と atonic に相當する。平板式=無核の用言が本當に無核なのか、充分に檢討されないまま議論がされてゐる可能性もある。本稿でもこの問題には觸れられないが、早田 (1965); 轟 (1995) は終止形が尾高、連體形が平板と考へてゐる。Martin (1967) は「無核」と言はれる用言が基底で尾高型のアクセントを持つとして表層形を導出してゐる。

則により説明するものである (早田 1965; Martin 1967)[*17]。もう一つは語幹に語彙的に指定されてゐるのは有核性のみとし (成: nar$^{[+ACC]}$-, 餓: ue$^{[+ACC]}$-)、語幹次末 (stem-penultimate) に核の位置を定める規則 (accent placement rule) と關聯諸規則を立てるものである (McCawley 1968: 143)。

核位置が基底で決まつてゐないと考へた方が、シンプルに説明できる事實がある。(13) のやうな擴張語幹は、前部が無核なら擴張語幹も無核、前部が有核なら擴張語幹も有核で、核の位置は擴張語幹全體の次末になるのである。

(13) a. nar-ase-ta (鳴), nar-a'se-ta (成); ue-sase-ta (植), ue-sa'se-ta (餓)

b. nar-are-ta (鳴), nar-a're-ta (成); ue-rare-ta (植), ue-ra're-ta (餓)

このことから、McCawley (1968) では (13) のやうな擴張語幹について、下位の語幹から有核性の指定を引き繼いだ上で核位置が決定される仕組みを提案した (14)。

(14) [[ue$^{[+ACC]}$]-sase] →[[ue$^{[+ACC]}$]-sase$^{[+ACC]}$] →ue-sa'se

位置の決まつてゐない有核性を語彙的に指定する仕組みは、基底で核位置を指定する仕組みに比べて優るところが多いやうに思はれる。早田 (1965) では語幹後續形式に對する語彙的なアクセント情報があまりに多く指定されてをり、多くの語彙的アクセント情報があるにも拘はらず、ほとんど一定の位置に表層アクセントが落ちることをさらなる説明として求めたくなる。のちに、早田 (1999: 314–319) は語幹の有核性指定、擴張語幹の有核性引き繼ぎ、次末への核の插入について、McCawley (1968) の案を採用してゐる。

アクセント位置を語彙的なものだとし、無理な分析になつてゐる例を見たい。Martin (1967) は、不規則なアクセント位置をもつものとして知られてゐる「通る」、「歸る」(to'or-u, ka'er-u であり too'r-u, kae'r-u ではない) を、基底に to'or-, ka'er- とアクセント位置を設定した上で、終止・連體形の導出を例示してゐる。しかし、擴張語幹に對するアクセント付與の仕組みを見ると、これらの語彙の振る舞ひを完全には記述できてゐないやうに見える。Martin (1967) では、-sase- や -rare- は語幹のアクセントを決まつた回數後ろにずらす性質をもつものとされてゐる。だとすれば、これらの動詞の場合には、他の動詞と異なり、擴張語幹でも一つ前にアクセントが置かれることが豫想される。しかし、實際にはこれらの動詞は次のやうに、語幹擴張を經れば通常の語幹次末アクセントを示す。このことは、有核性の引き繼ぎと、語幹次末位置へのアクセント核付與が他の動詞と同樣起こると考へれば説明が可能である。

[*17] 早田 (1965) のアクセント導出規則は、嚴密に言へばアクセントを「移動」させるものではなく、基底に指定された多數の（潛在的）アクセント位置が互ひに作用する形で削除などの變形を受けてゆくものである。

(15) a. toor-a'se-ta, toor-a're-ta, toor-ase-ra're-ta

b. kaer-a'se-ta, kaer-a're-ta, kaer-ase-ra're-ta

これらの動詞の振る舞ひの説明には、toor$^{[+ACC]}$-u の規則的な核位置決定 (too'r-u) の後に、アクセント位置を前に動かす (to'or-u) 操作 (Zamma 1992) を想定するか、to'or$^{[+ACC]}$-u のやうに有核性と核位置指定の両方を想定する必要があるやうに思はれる。前者の解釋においては、「通る」など一部の語彙について語彙的かつ義務的なアクセント移動が起こると考へるべきではないか[*18]。語彙的・義務的なアクセント移動を too$^{<}$r$^{[+ACC]}$-u のやうに表示することにしておきたい。ここで、「$^{<}$」はこの位置に核が付與された場合に一つ前のモーラに移動させるやうな、語彙的情報に關する記號とする。

3.2 語幹核の位置決定に關はる領域

McCawley (1968) は-ta, -te などに先行する語幹の次末を有核動詞の基底の核位置 (ta'be-te) と考へた上で、終止・連體形、連用形、命令形など特定の語形に見られる「語幹末」アクセント (11) （つまり語形全體の次末アクセントのパタン）を導出するためのアクセント引き寄せの規則を立てる (ta'be-ru→tabe'-ru)[*19]。

これに對し Zamma (1992) はアクセント核の位置決定に關はる領域 (16, 17) としての「語幹」を設定し、有核動詞の核が一貫して次末に付與される仕組みを考へる。McCawley (1968) のアクセント引き寄せ規則は 1 モーラ分後ろにずらすだけの規則なので、もし「語幹」の後續モーラを含めた領域の設定が適切ならば、核位置を次末に決める過程のみが必要であることになり、手續き的には非常にシンプルで魅力的である。しかも、この領域（以下では語幹核領域をブラケットで圍んで示す）の性質を見てゆくと、非常に興味深いことが分かる。

(16) a. [nar-i] (鳴), [na'r-i] (成); [ue] (植), [u'e] (餓)

b. [nar-u] (鳴), [na'r-u] (成); [ue-ru] (植), [ue'-ru] (餓)

c. [nar-e] (鳴), [na'r-e] (成); [ue-ro] (植), [ue'-ro] (餓)

[*18] 「考へる」は kanga'e-ru∼kangae'-ru のやうな搖れを示す。このやうな隨意的なアクセント移動とは區別して考へる必要がありさうである。

[*19] このアクセント引き寄せ規則は John Chew が 1961 年の博士論文（筆者未見）で考案したものだといふ (McCawley 1968: 143)。Chew (1973) は博士論文を改訂したものだが、McCawley (1968) と Chew (1973) の「引き寄せ規則」は內容が異なる。Chew (1973) で「アクセント引き寄せ規則」として例示されてゐるのは「泳ぎ方」oyo'g-ikata → oyogika'ta や「遊び方」asob-ikata → asobikata (p.30) で、その他の語形の導出例 (pp.32–33) を見ても、本稿ですでに紹介した有核性の引き繼ぎ規則に相當するものである。

d. [nar-a-zu] (鳴), [nar-a’-zu] (成); [ue-zu] (植), [ue’-zu] (餓)

(17) a. [naQ]-te (鳴), [na’Q]-te (成); [ue]-te (植), [u’e]-te (餓)

b. [naQ]-ta (鳴), [na’Q]-ta (成); [ue]-ta (植), [u’e]-ta (餓)

以下、本稿では Zamma (1992) の提案した領域を、語幹核の位置決定に關はる領域（つまり語幹核位置決定領域、略して語幹核領域）と呼ぶことにする。すでに見たやうに語幹に關してさまざまな立場がありえ、活用形を交替語幹として解釋できる可能性にも言及した。この現象は活用形が交替語幹であることをカタチで示すものだと考へるが、この節ではアクセントの現象に固有の領域として論じることにする。この領域によつて付與される核位置は、多くの人の考へる語幹の內部にあるので、まづは「語幹核」の決定領域であれば用語法として當面問題もなからう。

語幹核位置決定領域は、佐久間 (1919) のいふ起伏式・平板式の對立を綺麗に次末核・無核で示してくれるカタチだと言へる。このカタチが認められるなら、領域末尾の境界は手に取るやうに分かることになる。例へば音便の起こる [ka’-i]-te などの表面的なつなぎ目は、先行部分に所屬することになる。

ここまでは用言の前部が有核性を決定する例を見た。用言語形の後部によつて全體の有核性が變はることがある。例へば、前部の有核性に拘はらず、(18) のやうに有核型の語形が現はれることがある。

(18) a. [nar-i-ma’s-u] (鳴), [nar-i-ma’s-u] (成); [ue-ma’s-u] (植), [ue-ma’s-u] (餓)

b. [nar-u-ma’i] (鳴), [nar-u-ma’i] (成); [ue-ma’i] (植), [ue-ma’i] (餓)
～[ue-ru-ma’i] (植), [ue-ru-ma’i] (餓)

c. [nar-o’o] (鳴), [nar-o’o] (成); [ue-yo’o] (植), [ue-yo’o] (餓)

このやうな場合について、Zamma (1992) は-mas$^{[+ACC]}$-, -mai$^{[+ACC]}$, -yoo$^{[+ACC]}$ のやうに、後部要素に有核性が指定されてゐると見る。上位の擴張語幹に有核性指定がある場合は下位の語幹の核の有無が上位に引き繼がれないわけである。

以上に紹介したやうに、Zamma (1992) は、動詞自體の有核性、語幹擴張要素の有核性、擴張語幹の有核性引き繼ぎを想定することで、用言のアクセント形を說明しようとする試みである。ここにはいくつか、仕組みに關する修正・追加の必要がありさうである。

Zamma (1992) は、語幹後續要素を二つのレベルに分けてをり、最終要素には L トーン付與がなされる。この、最終要素に對する L トーン付與といふ假定には、問題があるやうに思はれる。

L トーン付與の分かりやすい問題點は-ta’ra, -ta’ri の分析に見られる。Zamma (1992) はこれらを-ta’-ra, -ta’-ri と分析し、無核動詞の場合に -ta’ は語幹末の H がスプレッドするレベル、-ra, -ri は デフォルトの L を付與するレベルの接辭としてゐる。-ta’ra, -ta’ri が-ta に -ra, -ri の後續したものといふ考へ方は正當化しにくい。ここでは、接尾辭にアクセント位置の指定があると想定し ([na’Q]-ta’ra, [na’Q]-ta’ri)、つとに早田 (1965); Martin (1967); McCawley (1968) が提案してきた通り、導出の過程で二番め以降のアクセントを削除する規則を想定するのが適當であらう。

さらに、-ta’ra, -ta’ri に關して、L トーン付與では說明しきれない現象が殘つてゐる。Oshima (2014) の觀察する通り、アクセント削除規則に二種類があると思はれるのである。一つは (19a) の [u’e]-ta(’)ra や (19b) の [u’e]-ta(’)ri のやうに、語中の二つの核が 2 モーラ以上の間隔を置かれてゐる場合の後續核の削除で、この場合の削除は隨意的に起こる。

(19) a. [naQ]-ta’ra (鳴), [na’Q]-ta(’)ra (成); [ue]-ta’ra (植), [u’e]-ta(’)ra (餓)

b. [naQ]-ta’ri (鳴), [na’Q]-ta(’)ri (成); [ue]-ta’ri (植), [u’e]-ta(’)ri (餓)

この現象からも、これらの形式には-ta’ra, -ta’ri のやうに音素的な下降位置（核）が指定されてゐると考へられる。

なほ、もう一つの後續核削除規則は次のやうな場合に見られる。

(20) a. [nar-e]-’ba (鳴), [na’r-e]-ba (成); [ue-re]-’ba (植), [ue’-re]-ba (餓)

b. [nar-e]-’domo (鳴), [na’r-e]-domo (成); [ue-re]-’domo (植), [ue’-re]-domo (餓)

ここで基底の -’ba や -’domo の核は有核動詞の語形では見られない。アクセント導出の過程で隣接する二つのモーラに核が付與された場合は後續核が義務的に削除されると考へることができる。

ここまでの例で分かる通り、語幹核領域は-(i)（連用）、-(r)u（終止・連體）、-(r)e（假定）、-e/-ro（命令）などの後續形式を組み込むやうにできてゐる。これらの接辭を Zamma (1992) は語幹形成辭と呼んだ。また、音便を起こした連用形も語幹核領域の最終要素になる。しかし、-(y)oo[+ACC], -sase-, -rare- は未然形由來の部分の切り分けを要するやうなアクセント上の振る舞ひはなく、それぞれ一體となつて語幹核領域の最終要素になる。

動詞アクセントの導出のために、以上の仕組みでは說明しきれないものが殘つてゐる。1 モーラ語幹の振る舞ひと、後續形式がもたらす平板化について簡單に紹介する。

1 モーラ語幹は、語幹形成辭によつて 2 モーラ以上に擴張されない場合、1 モーラの語幹核領域を形成する。この場合、有核動詞の核位置は、語幹末になる ([mi’]-ta ↔ [ta’be]-ta)。

次に、後續形式の中には「食べな」の -na のやうに、語幹核を取り消し、語形全體を平板にするものがある。このやうな後續形式は、それ自體が無核性「[−ACC]」を持つてをり、語幹核領域に參加するものと捉へても良いかもしれない[*20]。

(21)　[[tabe$^{[+ACC]}$]-na$^{[-ACC]}$]

有核動詞・無核動詞の活用形のアクセントが次末核・無核の綺麗な對比をなす領域になつてゐる事實は木部 (1983) によつてすでにほとんど示されてゐた。それとは獨立に、Zamma (1992) によつて動詞語幹に對するアクセント核位置決定に關はるとされた領域（の最終要素）が、學校文法の連用形（音便）、連用形、終止・連體形・假定形、命令形を含む活用形に一致することになる。活用形といふ形態音韻的な領域は、さらなる考察に値する。次に、Zamma (1992) の議論から離れ、否定動詞と未然形の問題について本稿の立場を明らかにしておく。

3.3　未然形と否定動詞

口語に用ゐられうる語形では、未然形が語幹核位置決定領域の最終要素になるのは四段動詞に否定の「-ず」が付くときのみのやうである。

(22)　[nar-a]-zu (鳴), [na’r-a]-zu (成)

有核動詞に-zu が付く場合のアクセント實現には搖れがあり、na’r-a-zu (22) のほか、nar-a’-zu (23=16d) があり、こちらの方が新しい形式のやうである (郡 2015: 68 註 7)[*21]。筆者の內省でも「新しい」形式が優勢であり、na’r-a-zu の形式はよくよく考へれば聞いたことがあるやうに思ふといふ程度の容認度しかない。

この搖れは、未然形を語幹核領域とする (22) の構造から後續の-zu までを語幹核領域とする (23) の構造への變化がほぼ完了してゐることを示してゐるやうに思はれる。

[*20] 早田 (1999: 315) は［＋ア］/［－ア］（本稿の [+ACC]/[−ACC]）のほかに［＋平板化］の特徵を想定してゐる。［＋平板化］は複合名詞 (midori#iro など) の後部要素 (iro’ など) の振る舞ひを說明するためのものである。このやうに、用言以外を見渡す場合には、單獨での實現と複合語後部要素としてのはたらきの兩方を說明するために［＋平板化］のやうな特徵が必要になる可能性がある。

[*21] 奧村 (1956) の「ズ」の分類は 4「有核型の詞の核を保つ、辭自ら核をもたない」とされ、傳統的な na’r-a-zu(成), u’e-zu(餓) などを說明するものと思はれる。しかし、一段動詞で u’e-zu の形式が存在するかどうか、確證が得られなかつた。秋永 (1989) の「アクセント習得法則」の表 2(p.42) に示されるところも、傳統的な na’r-a-zu(成) などを說明するものであるが、有核一段動詞の例が mi’-zu しかなく、[mi’]-zu なのか [mi’-zu] なのか、本稿の方法では確認することができない。一方、早田 (1965) は -zu の持つアクセント情報を終止・連體形の -ru と同一と見て yoma’zu#ni (讀)、oki’zu(ni) (起) などの（新しいと思はれる）形式を擧げてゐる。

(23)　[nar-a-zu] (鳴), [nar-a’-zu] (成); [ue-zu] (植), [ue’-zu] (餓)　=(16d)

上記のやうに-zu が語幹の一部に組み込まれる方向での變化は、次のやうな否定動詞の諸語形を合はせ考へればそれほど不思議ではない。

(24)　a.　[nar-a-nu] (鳴), [nar-a’-nu] (成); [ue-nu] (植), [ue’-nu] (餓)

b.　[nar-a-na]-i (鳴), [nar-a’-na]-i (成); [ue-na]-i (植), [ue’-na]-i (餓)

c.　[nar-a-na]-’kere(’)ba (鳴), [nar-a’-na]-kere(’)ba (成);
[ue-na]-’kere(’)ba (植), [ue’-na]-kere(’)ba (餓)

d.　[nar-a-ne]-’ba (鳴), [nar-a’-ne]-ba (成); [ue-ne]-’ba (植), [ue’-ne]-ba (餓)

e.　[nar-a-zar-e]-’domo (鳴), [nar-a-za’r-e]-domo (成);
[ue-zar-e]-’domo (植), [ue-za’r-e]-domo (餓)

f.　[nar-a-na]-’ide (鳴), [nar-a’-na]-ide (成); [ue-na]-’ide (植), [ue’-na]-ide (餓)

g.　[nar-a-na]-’kute (鳴), [nar-a’-na]-kute (成); [ue-na]-’kute (植), [ue’-na]-kute (餓)

以上に見るやうに、語幹核領域は學校文法の全ての活用形を支持するものではない。語幹核領域がすなはち語幹だとすれば、否定語幹は [V-a-nu], [V-a-na], [V-a-ne], [V-a-zare] のやうに語幹交替が起こるものだが、[V-a]-zu の語形も [V-a-zu] のやうに全體が語幹として再解釋されつつあると説明できる[*22]。

興味深いのは無核動詞であるはずの「する」su-ru に「-ず」が付く場合、se’-zu のやうに有核の語形が出る問題である[*23]。この振る舞ひは、「せん（意志）」se’-N といふ語形にも見られるやうに、交替語幹 se[+ACC]- の有核性に由來すると考へるのが良いだらう。すると、アクセント的にも異なる指定をもつ未然形交替語幹が存在することになる。

文語的な、四段動詞未然形 +「ば」の形式は、比較的安定的に未然形が語幹核位置決定領域になるやうである。

---

*22 「-ず」の振る舞ひに關して、本稿の説明で解決できない問題として、「通る」、「歸る」に「-ず」の付いた形式の振る舞ひがある。筆者の内省では次の搖れを示すやうに思はれるといふことである。

(i)　a.　?[too’r-a]-zu～?[to’or-a]-zu, ?[kae’r-a]-zu～?[ka’er-a]-zu

b.　[toor-a’-zu], [kaer-a’-zu]

(i.a) のアクセント形は、傳統的と考へられるタイプである。筆者は受動的に僅かに容認するだけなので、判斷が定まらない。

*23 早田 (1965) の本文及び第 1 表には se’zu(ni) の 形式のみがあるが、佐久間 (1959: 91) は平板の sezuni を擧げてをり、平板の形式があつたのかもしれない。

(25) a. [yor-a]-’ba (ta’izyu=no ka’ge)

b. [iso’g-a]-ba (mawar-e)

c. (doku’=o) [kura’w-a]-ba/[kuraw-a]-’ba (sara=ma’de)[*24]

d. (hito=o) [noro’w-a]-ba (ana’ hutatu’)

この形式は、口語では諺・慣用句の類にしか見られず、一段動詞については筆者は內省がほとんどはたらかない。この未然形が語幹核領域として保たれてゐるのは、[V-e]-’ba の形式と充分に類似してゐるためだと思はれる。諺・慣用句でも未然形 +「ば」の形式は四段動詞に集中してゐるやうにも思はれる。つまり、口語で一段動詞未然形 +「ば」がなくなつてゐるのかもしれない。文語のシステムが口語に殘つてゐないのは、ある意味で當たり前とも言へるが、話者が自信を持つて發音できる文語形式とさうでない文語形式があるのではないか。自信を持つて發音される、口語に生きてゐる文語スタイルは文語の體系そのものと同一視してはいけないだらう。だとしても、(25) はたしかに、口語の中に生き長らへてゐるのではないか。

以上の通り、未然形が語幹核領域の最終要素になるのは、四段動詞が「-ず」や「-ば」のホストになる場合のみで、硬い調子であつたり、文語スタイルであつたり、アクセントの搖れが見られたりする。これ以外の環境における未然形は、語幹核領域の最終要素になることがない。

(26) a. [nar-ase-ru] (鳴), [nar-ase’-ru] (成); [ue-sase-ru] (植), [ue-sase’-ru] (餓)

b. [nar-are-ru] (鳴), [nar-are’-ru] (成); [ue-rare-ru] (植), [ue-rare’-ru] (餓)

c. [nar-o’o] (鳴), [nar-o’o] (成); [ue-yo’o] (植), [ue-yo’o] (餓)

否定動詞のアクセントでは、-na までが語幹核領域に含まれる。否定動詞の後續要素のうち、さらなる語幹擴張を引き起こさないものの實現をまづみよう。

(27) a. [nar-a-na]-i (鳴), [nar-a’-na]-i (成); [ue-na]-i (植), [ue’-na]-i (餓)

b. [nar-a-na]-ku (鳴), [nar-a’-na]-ku (成); [ue-na]-ku (植), [ue’-na]-ku (餓)

[*24] 「食らふ」のアクセントには有核の kura-’u と無核の kura-u のゆれがあるやうである。筆者の內省では無核で、[kura-u]/[kuraw-a]-’ba である。生まれ育ちが東京都の 72 歲女性（筆者の母）の發音は有核のパタンで、[kura’-u]/[kura’w-a]-ba であつた。語幹核領域自體は一致してゐる。

(28) a. [nar-a-na]-’kaQta (鳴), [nar-a’-na]-kaQta (成);

[ue-na]-’kaQta (植), [ue’-na]-kaQta (餓)

b. [nar-a-na]-’kere(’)ba (鳴), [nar-a’-na]-kere(’)ba (成);

[ue-na]-’kere(’)ba (植), [ue’-na]-kere(’)ba (餓)

c. [nar-a-na]-’kute (鳴), [nar-a’-na]-kute (成); [ue-na]-’kute (植), [ue’-na]-kute (餓)

上の通り、-i, -ku(27) には傳統的には核指定がなく、それ以外 (28) は初頭にアクセントが位置指定されてゐる。

(27) の無核動詞の否定は [nar-a-na]-’i (鳴) [ue-na]-’i (植) の實現ももち (29a)、主に「終止形」の時に用ゐられる[*25]。-i と -’i とのゆれがある。-ku についても [nar-a-na]-’ku (鳴) [ue-na]-’ku (植) のやうに -’ku とのゆれが認められるやうである (29b)。(29) には (27) と異なる實現形のみ示す。

(29) a. [nar-a-na]-’i (鳴), [ue-na]-’i (植)

b. [nar-a-na]-’ku (鳴), [ue-na]-’ku (植)

語幹核領域を考へると分かりやすいが、-i, -ku 以外の後續要素の初頭の核は、無核動詞否定形の語幹の切れ目を示すかのやうな分布をしてゐる。ここからの類推で-i～-’i と-ku～-’ku のゆれが出てきた可能性がある。

重要な點は、語幹核領域には未然形が限定的に認められる一方で、學校文法の「助動詞」の「ない」の付いた語形の語幹核領域は「活用形」「なかろ、なかっ/なく、ない、ない、なけれ」にならず、一貫して [V-a-na]- になる點である。これを語幹の問題と考へれば、[V-a-nu], [V-a-zu], [V-a-ne](-’ba) に見られるやうな語幹交替は主に有標なスタイルを生み出すために使はれるともいへよう。

そして、-kar-, -kere-, -ku-のやうなつなぎ的な要素が、アクセントの振る舞ひ上は後續形式の一部であることを見ることができる。あまり現はれない形式だが、上記の諸語形と -karoo[+ACC] の付いた形式 (30) と比較されたい。

(30) [nar-a-na-karo’o] (鳴), [nar-a-na-karo’o] (成); [ue-na-karo’o] (植), [ue-na-karo’o] (餓)

-kaQta/-karoo[+ACC] に一見共通に見られる-kaQ-/-kar- の部分はアクセントの振る舞ひの上では境界が確認されない。-kaQta は -ta と同様語幹核領域に組み込まれず、-karoo[+ACC] は

[*25] 早田 (1965) -i が連體形語尾、-’i が終止形語尾としてゐる（早田の記號では-’i と-˥’i）。無核動詞の否定語尾の-’i はたしかに主に「終止形」の時に出るやうだが、連體形・終止形の違ひにそれほど明確に對應してゐないやうに思はれる。

-yoo[+ACC] と同様語幹核領域に組み込まれ、全體に次末核をもたらす。ここで、-’ba と同様に語幹核領域に組み込まれない-’kere’ba は 二つのアクセント核をもつやうであり、-’ba の形態の名殘が見えるが、ここでは無理な切り分けを行なはないでおく。

3.4 形容詞のアクセントとゆれ

傳統的な發音では、形容詞のアクセントも動詞と同樣に、有核形容詞と無核形容詞に分けられる。語幹核位置決定領域と次末へのアクセント核付與を想定すれば說明できることも動詞と同樣である。なかでも否定動詞によく似てゐる。

(31) a. [aka-i] (赤), [siro’-i] (白)

b. [aka]-ku (赤), [si’ro]-ku (白)

c. [aka]-’kaQta (赤), [si’ro]-kaQta (白)

d. [aka]-’kere(’)ba (赤), [si’ro]-kere(’)ba (白)

e. [aka]-’kute (赤), [si’ro]-kute (白)

形容詞は語幹核領域を一定に保つ傾向がある。このことも否定動詞と似てゐる。學校文法の活用形はここでも支持されない。しかし、否定動詞の振る舞ひとの違ひにも注意しなければいけない。[V-a-na]-i の -i (∼-’i) が語幹核領域の外に付くのに對して、形容詞の -i は語幹核領域に組み込まれる。これはたしかに奇妙なことである。次に述べるゆれのことを考へると、否定動詞と形容詞はこの點において傳統的に不均衡な構造をもつてゐたと考へてもよいのではないか。

よく知られてゐるやうに、形容詞の語形には新しいアクセント形式が現はれてをり、ゆれが見られる (秋永 1957)。(32) には (31) に對應する新形のみを擧げる。

(32) a. aka-’i (赤)

b. [aka]-’ku (赤), [siro]-’ku (白)

c. [siro]-’kaQta (白)

d. [siro]-’kere(’)ba (白)

e. [siro]-’kute (白)

このやうな形容詞のゆれは終止・連體形では無核型が有核型に、その他の語形では有核型が無核型に向かふやうな、交錯した傾向によつて二つの型が統合されつつあると把握されてゐる (清水 1970; 稲垣 1984)。たしかに表面的に見ればその通りなのだが、「語幹」の末

尾に核がある（小林 (2003) の N−1 型）やうな一貫したパタンを志向する動きと考へるのがよいだらう。

これを語幹核領域の觀點から見れば、新しいアクセントをもつ形容詞終止・連體形の語幹核領域は二つの設け方が考へられる。

(33) a. [aka’-i] (赤), [siro’-i] (白)

b. [aka]-’i (赤), [siro]-’i (白)

(33a) ではなく (33b) だと考へることで、説明できる事實が多い。(33a) のやうに語幹核領域を設定すると、終止・連體形のみ有核型の新しい形式が出現したことになり、無核語幹が有核語幹に變はつたのか、後續形式-i が-i[+ACC] に變はつたのか、いづれにせよ、わざわざゆれを生み出す動機が分からない。一方で (33b) のやうに語幹核領域を捉へると、他の語形と同様、終止・連體形でも無核化に向かつてゐることを見て取ることができる[*26]。

それだけではない。(33b) を想定すると、-’i が語幹形成辭でないこと、また初頭に核を持つてゐることの 2 點で、新形は否定動詞（特に新形 (29)）と足竝を揃へてゐると言へる。否定動詞と形容詞が歩み寄りを見せる、形態的な水平化への傾きを捉へることができる。そして、全體に語幹交替をなるべく起こさない方向に向かつてゐると言ふことができる。形容詞アクセントの新形においては、語幹核領域に語幹の有核性の對立を表現する役割はない。その代はり、後續要素の初頭の核が語幹の末端を示すやうにはたらいてゐるやうに見える。新形に完全に移行するやうなことがあるならば、核が語幹のものか、後續要素のものか、あるいは形態音韻規則で插入すべきものなのか、いづれ分からなくなつてしまふのかもしれない。しかし、形容詞の有核性對立は消失の危機までは迎へてゐないやうである (cf. 小林 2003)。

否定動詞はしばしば形容詞的な屈折をするものとして言及されてゐる。しかし、以上のやうに形容詞では-i が傳統發音で語幹核領域に組み込まれてゐるのに對し、否定動詞では組み込まれてゐない。また、形容詞に見られる有核語幹が無核化した新形の出現や、それによる有核性の對立の消失傾向は、否定動詞では見られない。否定動詞においては [ue-na]-(’)i（植）と [ue’-na]-i（餓）の對立は保たれてゐる。このやうなアクセント上の振る舞ひを見ると、否定動詞と形容詞には違ひもある。アクセントだけではなく、否定動詞と形容詞とでは屈折語形のいくつかにも異同が認められる。一方で連用形 +「たい」は形容詞と同様にアクセントのゆれを示すことが報告されてゐる (那須 2018)。連用形 +「たい」

[*26] 詳しく紹介できないが、Zamma (1992) の形容詞の新形の解釋では、一貫して有核に向かふといふことになる。

が眞の形容詞派生であるのに對し、否定動詞の形成には異なるところがあるのであらう。

この節では用言アクセントに關して Zamma (1992) の分析に基づいて語幹核領域を設け、アクセント導出の仕組みについては若干の修正・追加を加へて分析した。その結果、語幹核領域には未然形以外のいはゆる動詞活用形が最終要素として現はれることを確認した。また、未然形も限定的ではあるが語幹核領域になる場合があることを示した。動詞否定形と形容詞のゆれについて語幹核領域の觀點から、現象を正しく把握できる部分があると考へた。

4　用言語幹の形態音韻論

Zamma (1992) は語幹核領域に組み込まれる接尾辭、外側の接尾辭、その後ろにつく助詞などを分類し、それぞれ level 1、level 2、post-lexical と位置付けてゐる。これらの要素は順序よく付加され、形態音韻規則を適用されてゆくことになる。明示的には言はれてゐないが、英語の Class I/II 接辭の分類とレベル順序付けされた形態論の枠組み (cf. Siegel 1974; Kiparsky 1982) が用ゐられてゐる。大まかに派生 (1) と屈折 (2)、後語彙的の三段階に分けて考へてゐることも分かる。そして、それぞれのレベルを特徴付けるのは、形式のリストのほか、アクセントに關はる規則（擴張語幹の有核性引き繼ぎ、次末への核付與、各モーラへの H 挿入、デフォルトのピッチ連結）である。

アクセントは屈折語形の一部かと言へば、たしかにさうだらう。アクセント上の語形變化はどのやうなものだらうか。屈折語形のアクセントは語幹核の有無と屈折接辭のアクセント上の特徴の組み合はせでできてゐる。少なくともアクセントは最大語幹においては固定的に決まつてゐる。以下の基本的なパタンを見てみたい。

(34)　a.　鳴る: [nar-a]-zu, [nar-i], [naQ]-te, [nar-u], [nar-e]-’ba, [nar-e]

b.　成る: [na’r-a]-zu, [na’r-i], [na’Q]-te, [na’r-u], [na’r-e]-ba, [na’r-e]

c.　植ゑる: — , [ue], [ue]-te, [ue-ru], [uer-e]-’ba, [ue-ro]

d.　餓ゑる: — , [u’e], [u’e]-te, [ue’-ru], [ue’r-e]-ba, [ue’-ro]

無核動詞の「鳴る」と「植ゑる」は語幹内で無核を保ち續ける。有核動詞の「成る」と「餓ゑる」は語幹内で次末核を保ち續ける。分節音のレベルで起こる交替語幹の現象に伴つて、附隨するアクセントが交替することは稀である（「する」に對する se’-(zu) の一例のみであらうか）。あとは、屈折接辭の持つアクセント特徴との連結的な形態操作ばかりである。そこに、後續核の削除規則といふ過程があるやうであつた。アクセント的な（形態）音韻過程はその程度である。その範圍内で、アクセント面の語形變化を考へることになる。

日本語では、分節音的にもアクセント的にも連結的な形態的手段が用ゐられるといへるかもしれない。

有核用言に次末アクセントが付與される領域は、形態音韻的には分節音に關はる別の特徵も持つてゐるやうである。先に見た連結子音 r, s の問題は、次の意味で全てこの領域內で完結してゐる: 連結子音の前後の形式がともに領域內に存在し、連結子音の脫落も插入も、この領域外に波及することがない。また、「買ふ」の語幹 kaw- に見られる w に關する語幹交替あるいは w の脫落もこの領域で起こる。日本語には音韻プロセスが比較的少ないが、通常「脫落」規則で說明されるプロセスがすべてこの領域の內部で起こることになる。一方で連結母音はこの領域の末尾に生起することになる。そして、形容詞や否定動詞につく -'kaQta の例を除けば、音便を起こす連用形は必ずこの領域の最終要素になる。すると、語幹核領域は單に核の位置決定に關はるだけではなく、より廣く、用言の中核部に見られる形態音韻的なドメインをなしてゐるといふことができる。そして、形態論的に對應する概念は、Zamma (1992) の言ふ通り語幹しかないやうに思はれる。二つのアクセントの型がこの領域で對立する樣子は、さながら語幹聲調といつたところである。

その場合の語幹は、形態音韻的な用言中核部領域として、カタチの面で相當はつきり見えてゐるのではないだらうか。しかし、語幹核領域の觀點からは、複合的な語幹の場合に、最後尾の語幹の末尾の境界しか直接には見えないと反駁されるかもしれない。複合的な語幹の前方に位置する語幹の境界は確定できるだらうか。

河野 (1989: 1581) に「日本語の動詞すなわち用言は、語幹に種々なる接辭（助動詞）や助詞が付いて複合体を作る。これを用言複合体 (verb complex) と言う」とし、「いろいろな文法範疇を示す接辭が漸次累加することによって、具体的な複合体を作り上げていくのであって、次々と派生語幹を作っていく」といふ。アクセントの現象からも下位の語幹から上位の語幹に有核性が引き繼ぎされたり、上位の語幹によつて有核性が決定されたりする現象が見られた。このやうな過程を念頭におけば、上位・下位の語幹はすべて、潛在的に有核性が表現されえ、かつ連結子音の問題が內部で完結してゐるやうな、類同的な單位を設定する原則を立ててよいのではないだらうか。今未然形もこのやうな重層的な語幹構造に參加するものと認めて「書かせられなかつた」のアクセント導出過程で例示する。

(35) [[[[kak$^{[+ACC]}$-a]-se]-rare]-na]-'katta

→ [[[[kak$^{[+ACC]}$-a]-se$^{[+ACC]}$]-rare$^{[+ACC]}$]-na$^{[+acc]}$]-'katta

→ [kak-a-se-rare-na$^{[+ACC]}$]-'katta

→ kak-a-se-rare'-na-'katta

→ kak-a-se-rare'-na-katta

日本語の用言で、類同的な語幹が重層的な構造を取つてゐるとすると、大略、埋め込まれた語幹は派生接辭のホストであらうし、最大語幹は屈折接辭のホストであらう。派生と屈折に共通する交替語幹が存在することが一つの特徴になるだらう。このなかで、命令形は語幹單體で一つの屈折語形であり、自由語幹である。音便を起こした連用形と假定形は拘束語幹で屈折接辭しか付加されない[*27]。未然形は主に派生接辭のホストになる拘束語幹だが、屈折接辭を伴ふ例が文語スタイルとして二つばかり殘つてゐる。殘る終止・連體形と連用形はより多様な振る舞ひを見せる。

さて、音便連用形が領域末尾にしか見られないことには何か意味があるだらうか。語に一度しか起こらない現象であるなら、最上位語幹と屈折接辭の境界をマークしてゐる可能性もあるが、ひよつとすると、條件さへ整へば、重層的な語幹末のどこにでも起こりうる現象なのかもしれない。口語の用言でラ行音の語幹末に鼻音が後續する場合に、撥音化が起こりえる (セリック 2014)。この撥音化は、次に示すやうにいくつかの種類の後續要素の前で起こり、(四段動詞いかんに寄らない) 語幹末に特有の現象である可能性がある。

(36) a. [yar-u]='no → [yaN]='no, [kure-ru]='no → [kureN]='no

b. [yar-u]-'na → [yaN]-'na, [ake-ru]-'na → [akeN]-'na

c. [[kure]-na]-i → [[kuN]-na]-i, [[sir-a]-na]-i → [[siN]-na]-i

d. [[yar-i]-nasa'-i] → [[yaN]-nasa'-i]

この撥音化は、適切な語幹末母音削除の規則を立ててやれば、あとは連用形の音便に見られる鼻音化規則と同じもの (例へば黒田 (1967) なら「子音的分節は非母音的有声的分節の前で鼻音化する」) を、そのまま適用すれば導出できる。連結母音が語幹末に出沒することも考へ合はせると、IP 方式の目からは語幹末は母音が出入りする位置と言つてもいいのではないか。

本稿で扱つた形態音韻的領域を根據にすれば、語幹と後續形式の境界を確定することがかなり容易になる。連結音の歸屬や、音便形式の境界、否定動詞や形容詞に後續する -kar-, -kere- などの連結形式の歸屬を、言語事實から直接に確定することができる。ただし、殘された課題も多い。

まづ、有核性の指定は最も下位のレベルでは、語根に指定されてゐるとも考へられる。例へば ak-e-ru/ak-u, ag-e-ru/ag-ar-u のペアはともに無核動詞、sim-e'-ru/sim-a'r-u, sag-e'-ru/sag-a'r-u のペアはともに有核動詞である。重層的な語幹の中核部に語根があるとすれば、その

[*27] 「音便を起こした連用形」で指す内容にもよる。ここでは「取つ替へる」の「取つ」は含まない。

レベルでは類同的語幹の原則がはたらいてゐないことになる。

意志・推量の -(y)oo[+ACC]、否定意志・推量の -mai[+ACC] は語幹核領域に組み込まれる。屈折する助動詞であつた出自を今でも示すやうな、アクセント上の振る舞ひと考へるべきかもしれない。このやうな場合に語幹核領域を根據に全體が語幹であると考へてよいのかどうか、筆者は確信できない。

さらに、否定意志・推量の -mai[+ACC] については特別な接續パタンを取ることも氣に掛かる。これには變異があり、「飲むまい・食べるまい」といふ語形は終止・連體形に「まい」が付く [[V-ru]-ma'i] だが、「飲むまい・食べまい」といふ語形は特別な前接形 [[V-u]-ma'i] を想定しなければいけない。これは本稿で示した語幹の考へ方では、特定の後續形式に要求される、他に見られないタイプの下位の語幹となつてしまふ。

最後に、技術的な細部の問題を一つ擧げる。有核性の引き繼ぎが起こると考へられる後部要素のうち、-nagara は有核で實現する際、核が次末にこない。

(37)　[[nari]-nagara]（鳴）, [[nari]-na'gara]（成）, [[ue]-nagara]（植）, [[ue]-na'gara]（餓）

この現象については今のところ、-nagara に對してアクセントに關はる語彙的な情報を負はせるしかなささうである。Nishiyama (2010) は -nagara の 最終モーラのみが韻律外に置かれる (-naga<ra>) としてゐる。この見方を借りてくることもできる。本稿の中の一貫性を保つならば、次末のアクセントを前に一つずらす-naga<ra の形式（to'or-u などに關する §3.1 の最後の議論を參照されたい）を想定すべきかもしれない。

5　をはりに

用言の語幹を形作るものが、基本的に舊來の活用形であると考へた。語幹の核の位置決定に關はる領域を觀察すると、交替語幹を形作る部分と、後續部分の境界がはつきりする。

學校文法の活用形といふと、言語學者の間では實に評判が惡い。しかし、幾分の修正が必要であるにしても、活用形が本稿で示したやうな形態音韻的領域であるとすれば、その存在意義を言下に否定し去ることはできない。また、現在通行してゐる、日本語の動詞の語幹を短く設定する流儀は、必ずしも唯一の可能性ではない。不規則動詞を含めた統一的な記述・分析を目指す場合に一つの方法として語幹交替による動詞形態の說明がありえる。活用形はそのやうな交替語幹の立派な候補であり、しかも本稿で示したやうな、なんらかの形態音韻的な實體をもつものである可能性がある。

参考文獻

秋永一枝 (1957) 「アクセント推移の要因について」『国語学』31、17–27.

秋永一枝（編） (1989) 『明解日本語アクセント辞典 第二版』、東京: 三省堂.

Bloch, Bernard (1946) Studies in Colloquial Japanese I: Inflection. *Journal of the American Oriental Society* 66(2), 97–109.

セリック・ケナン (2014) 「現代日本語におけるラ行音便について」修士論文，京都大学大学院.

de Chene, Brent (2009) 「Description and Explanation in Inflectional Morphophonology: The Case of the Japanese Verb」『早稲田大学教育学部学術研究（英語・英文学）』57、1–22.

Chew, John J. (1973) *Transformational Analysis of Modern Colloquial Japanese*. The Hague: Mouton.

江畑冬生 (2013) 「統語法から見た日本語動詞の活用体系」『人文科学研究』133、1–19.

芳賀綏 (1962) 『日本文法教室』、東京: 東京堂.

服部四郎 (1950) 「附属語と附属形式」『言語研究』15、1–26, 103–104.

早田輝洋 (1965) 「動詞・形容詞などの活用とアクセント」『NHK 文研月報』4 月号 (1965・4)、30–39, 73, 折込付表 3 點.

——— (1966) 「東京方言の音韻化規則」『言語研究』49、55–69.

——— (1999) 『音調のタイポロジー』大修館書店.

稲垣滋子 (1984) 「アクセントのゆれに関わる要素について」平山輝男博士古稀記念会（編）『現代方言学の課題』、281–307、東京: 明治書院.

木部暢子 (1983) 「用言の活用形とアクセント」『文献探究』12、1–10.

Kiparsky, Paul (1982) Lexical morphology and phonology. In Yang, In-Seok ed. *Linguistics in the Morning Calm*. 3–91, Seoul: Hanshin.

清瀬義三郎則府 (1971) 「連結子音と連結母音と–日本語動詞無活用論–」『国語学』86、(13)–(27).

小林めぐみ (2003) 「東京語における形容詞アクセントの変化とその要因」『音声研究』7 (2)、101–113.

河野六郎 (1955)「朝鮮語」市川三喜・服部四郎（編）『世界言語概説下巻』、357–439 研究社.

——— (1989) 「日本語の特質」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『言語学大辞典 第 2 巻 世界言語編（中）』、1574–1588 三省堂.

郡史郎 (2015) 「助詞・助動詞のアクセントについての覚え書き: 直前形式との複合形態の

観点からの分類」『言語文化共同研究プロジェクト.2014』、63–74.
黒田成幸 (1960) 『言語の記述』、東京: 研究社.
——— (1967) 「促音及び撥音について」『言語研究』50、85–99.
黒木邦彦 (2012) 「二段動詞の一段化と一段動詞の五段化」丹羽一彌（編）『日本語はどのような膠着語か』、104–121、東京: 笠間書院.
Martin, Samuel E. (1967) On the Accent of Japanese Adjectives. *Language* 43(1), 246–277.
益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法』、東京: くろしお出版，改訂版.
Matsui, Michinao (1996) An Introduction to JPSG Phonology. In Gunji, Takao ed. *Studies on the Universality of Constraint-Based Phrase Structure Grammars*. 111–142, Osaka: Osaka University, (科研費報告書).
McCawley, James D. (1968) *The Phonological Component of a Grammar of Japanese*. The Hague: Mouton.
三上章 (2002[1972]) 『現代語法新説』、東京: くろしお出版.
宮岡伯人 (2002) 『「語」とはなにか』、東京: 三省堂.
——— (2015) 『「語」とはなにか 再考: 日本語文法と「文字の陷穽」』、東京: 三省堂.
村山七郎 (1965) 「日本文法の特質」『口語文法の展望』、1–23、東京: 明治書院.
ナロク・ハイコ (1998) 「日本語動詞の活用体系」『日本語科学』4、7–30.
那須昭夫 (2018) 「付属語「たい」の音調変異」『筑波日本語研究』22、1–33.
Nasukawa, Kuniya and Phillip Backley (2011) The internal structure of ‘r’ in Japanese. *Phonological Studies* 14, 27–34.
Nida, Eugene A. (1970) *Morphology: The Descriptive Analysis of Words*. Ann Arbor: The University of Michigan Press, 2nd edition.
西山國雄 (2012) 「活用形の形態論、統語論、音韻論、通時」三原健一・仁田義雄（編）『活用論の前線』、153–189、東京: くろしお出版.
Nishiyama, Kunio (2010) Penultimate accent in Japanese predicates and the verb–noun distinction. *Lingua* 120, 2353–2366.
丹羽一彌 (2012a) 「サ四動詞音便語幹と後続形式」丹羽一彌（編）『日本語はどのような膠着語か』、87–103、東京: 笠間書院.
——— (2012b) 「日本語の連辞的語構成」丹羽一彌（編）『日本語はどのような膠着語か』、2–29、東京: 笠間書院.
沖久雄 (1989) 「学校文法活用論について」『奈良教育大学国文：研究と教育』12、54–64.
奥村三雄 (1954) 「單位語の認定—形態論の立場—」『國語國文』23 (8)、46–56.

——— (1956) 「辭の形態論的性格」『國語國文』25 (9)、1–14.

Oshima, David Y. (2014) On the morphological status of -te, -ta, and related forms in Japanese: evidence from accent placement. *Journal of East Asian Linguistics* 23, 233—265.

阪倉篤義 (1957)「日本語の活用—動詞の活用を中心に—」岩淵悦太郎・林大・大石初太郎・柴田武（編）『現代国語学 II 言葉の体系』、189–215、東京: 筑摩書房.

佐久間鼎 (1919) 『國語の發音とアクセント』、東京: 同文館.

——— (1936) 『現代日本語の表現と語法』、東京: 厚生閣.

——— (1959) 『標準日本語の発音・アクセント』、東京: 恒星社厚生閣.

佐々木冠 (2012) 「未然形は存在しないのか」原口庄輔（編）『科学研究費補助金基盤研究 (A)「自律調和的視点から見た音韻類型のモデル」研究成果報告書　第 1 部』、59–76 明海大学.

——— (2016) 「現代日本語における未然形」庵功雄・佐藤琢三・中俣尚己（編）『日本語文法研究のフロンティア』、21–42、東京: くろしお出版.

Shibatani, Masayoshi (1990) *The Languages of Japan*. Cambridge: Cambridge University Press.

清水郁子 (1970) 「東京方言のアクセント」平山輝男博士還暦記念会（編）『方言研究の問題点』、134–172、東京: 明治書院.

城田俊 (1979) 「国語動詞の活用（語形変化）」『北海道大学人文科学論集』16、123–152.

Siegel, Dorothy Carla (1974) Topics in English morphology. Ph.D. dissertation, Massachusetts Institute of Technology.

鈴木重幸 (1996) 『形態論・序説』、東京: むぎ書房.

田川拓海 (2012) 「分散形態論を用いた動詞活用の研究に向けて」三原健一・仁田義雄（編）『活用論の前線』、191–216、東京: くろしお出版.

千田俊太郎 (2012) 「基底の音節構造: 朝鮮語の媒介母音」『ありあけ　熊本大学言語学論集』11、1–46.

轟靖子 (1995) 「終助詞から見た平板型動詞のアクセント」『音声学会会報』208、1–8.

時枝誠記 (1978[1950]) 『日本文法 口語篇』、東京: 岩波書店.

角田三枝 (2007) 「日本語の動詞の活用表」『立正大学国語国文』45、1–7.

Vance, Timothy J. (1987) *An Introduction to Japanese Phonology*. Albany: State University of New York Press.

屋名池誠 (1987) 「述部のアクセント—現代東京方言述部の形態=構文論的記述 [3]—」『学苑』573、106–91.

——— (2005)「活用とアクセント」社団法人日本語教育学会（編）『新版日本語教育事典』、

78–80 大修館書店.

Zamma, Hideki (1992) The Accentuation System of Japanese Inflection. *Tsukuba English Studies* 11, 117–148.

(ちだしゅんたらう、京都大學大學院文學研究科)